

## はじめに

私たちの現在の行動は、遠い未来にまで影響を与えることがある。その影響は、ときとして、まだ生まれていない、これから生まれてくる世代を脅かすこともあり得る。私たち「現在世代」は、未来世代に対して、倫理的な配慮をする責任がある。「未来倫理」とは、このような責任をどのように考えたらよいのか、そしてそれをどのように実践したらよいのかを考える、倫理学 (ethics) の一領野だ。本書はこうした未来倫理について解説するものである。

現在世代は未来世代を脅かす。これは決してサイエンス・フィクションではない。例えば、私たちが日々乗っている自動車によって、温室効果ガスが排出される。温室効果ガスは気候変動を引き起こす。気候変動に歯止めがかからなくなれば、一〇〇年後に生まれてくる世代が甚大な被害を受ける可能性がある。もちろん、気候変動だけが問題ではない。私たちの日常を支えるテクノロジーの影響は、それが蓄積していくことによって、さまざま

まな形で未来世代に対する脅威になり得る。私たちはそうした脅威を社会課題として解決していかなければならない。それが未来倫理の基本的な態度である。

未来倫理は倫理学の応用的な分野である。そして、そうした分野には他にもいろいろなものがある。最先端のバイオテクノロジーがもたらす倫理的課題を考える生命倫理、人間による自然環境の破壊について考える環境倫理、人間のために虐げられてきた動物たちの権利を考える動物倫理。これらは多くの研究者にとって優れた解説書が書かれ、世に送り出されてきたため、世間での知名度も高いかもしれない。それに対して、未来倫理について網羅的に解説した書籍は、筆者が知る限りは存在しない。したがってその知名度も高いとは言えない。

しかしそれは、未来倫理が現代社会においてそれだけ重要度の低いテーマである、ということを意味するわけではない。事実はむしろその反対だろう。深刻化の一途を辿る<sup>たど</sup>気候変動だけを取ってみても、未来世代への責任が私たちにあって喫緊の課題であることは疑う余地がない。むしろ未来倫理は、いまこそ私たちが改めて向かい合うべき、学び直すべき問いであると考えられる。

ここに本書の根本的な動機がある。本書は、まだ未来倫理について詳しく知っているわ

けではない読者に対して、この分野のさまざまな論点を網羅的に紹介することを目指している。それによって、未来世代への責任について少し踏み込んで考えたい、という意志を持つ読者の要求に応えることが、本書の狙いである。

さて、ここまで読んで、あなたは未来倫理が自分と関係のあるテーマだと思っただろうか。それとも、それは一部の専門家が取り組めばよい問題であり、自分には関係ないと思っただろうか。

もし、自分には関係がないと思っただとしても、それは不思議ではない。なぜなら未来世代への脅威は、一人の個人の行動によってではなく、そうした行動の累積によって、いわば人類規模の集団による行動の帰結として、生じるからである。

例えば、あなたが気候変動を憂慮し、明日から自動車に乗ることをやめたとしよう。それはとても素晴らしいことだ。しかし、もしもあなた以外の全ての人々が行動を変えないなら、あなたがどれだけ頑張っても気候変動は解決されないだろう。

もちろん、一人ひとりの個人がそれぞれに努力し、一斉に行動を変容させることも可能かもしれない。しかし普通に考えてそれは簡単ではない。むしろ、そのように集団的な行

動を変えるためには、公共的な政策を講じることによって、社会のシステムを変えていく必要がある。しかし、そうであるとしたら、未来倫理が重要なのだとしても、それはそうした政策を考える人にとって重要なのであって、個人には関係ないということになってしまふのではないか。それがごく一般的な考え方のようにも思える。

けれども、実はそんなことはない。私たちは個人としても未来倫理の実践に関与することができるとは思わない。私たちは個人として未来倫理の実践に関与することができるとは思わない。

まず、一人の市民として私たちにできることは、政治家に対して意見を表明することである。例えば選挙において投票することで、政策に対して賛否を表明すれば、政治家に対して自分の意見を提示することができる。あるいは選挙を介さずとも、何らかの活動を行って、こういう政策を作って欲しい、こういう問題を解決して欲しいと、訴えかけることもできる。政治を変えるのは簡単ではないが、議会制民主主義を採る国であれば、このような形で個人が行動を起こすことは可能である。

別のアプローチの仕方もある。それは、消費者として未来倫理の実践に関与するということだ。消費者としては、どうということだろうか。一言で言えば、それは未来に配慮した企業から商品やサービスを購入する、という関わり方である。近年、社会課題の解決へ

の取り組みは、「企業の社会的責任（CSR：corporate social responsibility）」として、重要な企業活動として認識されている。したがって、未来への倫理的な配慮に取り組む企業を支援することは、消費者として未来世代に寄与することを意味するだろう。

そうであるとするれば、未来倫理は決して専門家だけが知っていればいい問題ではない。これが、本書があなたに対して提供できる価値の一つである。あなたは、選挙で投票するたびに、どこかで何かを買うたびに、それによってある未来の実現に対して加担している。だからこそ、私たちは未来世代に対してどのような影響を与えるべきか、未来世代をどのように配慮するべきか、という問いについて、何らかの首尾一貫した考えを持っていなければならぬ。少なくともそれが現代を生きる人々のより望ましいあり方だろう。そして、未来倫理の知識は、そうした自分なりの意見や考えを形作るための、さまざまな手がかりを提供してくれるのである。

本書は哲学や倫理学の専門家を読者の対象としているわけではない。むしろ、そうした学問にこれまで触れてこなかった方、興味はあるけれど敬遠してきた方にも、ぜひ本書を手にとって欲しいと考えている。

未来倫理の議論はただの知識としてもとても興味深い。しかし、それを雑学として活用するだけに留ま<sup>とど</sup>ってしまうことは、そうした知識の真の価値を損なうことになるだろう。それらはむしろ実践に役立てられてこそ真価を発揮する。だからこそ、筆者は本書の内容を、いわば「使える知識」として活用してもらいたいと考えている。

そうした観点から、本書は人物や歴史の解説に終始するのではなく、この分野における重要な問いをいくつか立て、その問いに答えていく、という形で議論を紹介していく。それによって、読者は未来倫理の基礎から応用までを、自然に、かつ段階的に知ることができると考えられるからである。

各章の概要を説明しよう。

第一章では、「未来倫理とは何か？」という問いを扱う。恐らく読者の多くは未来倫理という言葉自体を本書において初めて目にしたのではないだろうか。本章では、倫理学という、より大きな学問分野の中で、未来倫理がどんな特徴を持つ分野なのか、そこでは何が考えられているのかを概観する。

第二章では、「未来倫理はなぜ必要なのか？」という問いを扱う。ここでは、なぜ現代がこのような状況に陥ってしまったのか、なぜテクノロジーがこれほどまでに猛威を振る

っているのか、ということを経史的に考えていく。それによって、なぜ個別の課題を個別に解決するだけではなく、未来倫理の統合的な理論が必要なかを説明する。

第三章では、「未来倫理にはどんな理論があるのか？」という問いを扱う。未来倫理の理論は一つではない。そこには非常に個性的で斬新な理論が数多くある。本章では、そのうちの主要な理論として、契約説、功利主義、責任原理、討議倫理、共同体主義、ケアの倫理という六つの立場からなされるものを紹介し、マッピングする。

第四章では、「未来倫理はどんな課題に応えるのか？」という問いを扱う。本章では、未来倫理が議論される典型的な社会課題として、気候変動、放射性廃棄物の処理、生殖細胞へのゲノム編集を取り上げる。また、それらに対して未来倫理の理論を応用し、問題を整理していく。

第五章では、「未来倫理は未来を予見できるのか？」という問いを扱う。本章では、未来倫理を社会の中で実践するために避けることができない課題として、どのようにして未来を予見するのか、という問題を考える。また、その条件を抽出した上で、未来倫理の社会実装として有効であると考えられる取り組みの具体例を紹介する。

本書は、一般の方々を読者に想定しているため、可能な限り平明な文章で説明すること

を心掛ける。難解な理論を紹介する際に、ときには大胆に細部を省略したり、専門用語をあえて避けたりすることがあるかもしれない。それは、この分野に詳しい読者にとっては不満を抱かせるかもしれないが、本書が引き受けようとする社会的使命による制約として、ご容赦願いたい。

最後に、本書の基本的な態度を説明しておきたい。

「未来倫理」と聞くと、もしかしたら、これまで語られることのなかった、全く新しい倫理学の領域を想像するかもしれない。誰も聞いたことのない独自の理論の体系を期待するかもしれない。しかし本書が紹介しようとするのは、むしろ、一般的な倫理学の議論の延長線上で、未来世代への責任を考える手がかりである。もちろん、問題のスケールは大きいし、議論の過程でSF的な思考実験をすることもあるだろう。けれども、飛び道具のような新奇な概念が飛び出してくるわけではない。

一般的な倫理学の議論の延長線上で考える、とはどういうことだろうか。そもそも倫理学とは何か、ということは第一章で考えるところとして、そこで問題になるのは、例えば、人を殺してはいけないのはなぜか、人に嘘をついてはいけないのはなぜか、といったことであ

る。数千年に及ぶ歴史の中で、哲学者はこのような問題について考え、膨大な議論の蓄積を残してきた。そしてその遺産が、今日の一般的な倫理学の問題圏を形作っているし、それだけではなく、法学・社会学・経済学などの他の学問の基礎にもなっている。未来世代への責任という問題は、確かに、現代社会において突如として出現した新しい問題である。しかし、私たちはそれをあくまでもこうした一般的な倫理学の中に組み入れ、包摂し、組織化しなければならぬのだ。

なぜ、そうした態度を取る必要があるのだろうか。それは、未来世代への責任は、あくまでも私たちがいま生きている日常的な世界と地続きの問題として、考えられなければならないからだ。

もしも未来倫理が、従来の倫理学から切断された、全く新しい特殊な倫理学の領域として、あたかも浮島のような分野として捉えられてしまったら、そこから導き出される答えは、あなたの日常的な世界からも遊離したものになる。それは未来倫理を、「そんなことは考えていなくても日常生活は成り立つのだけど、でも余裕があるなら考えてみよう」といった態度でしか取り組まれることのない、二次的で副次的な領域にすることを意味する。しかし、そのように考えるとしたら、私たちの日常における倫理的判断と、未来倫理が

著しく乖離<sup>かひり</sup>したり、あるいは衝突したり、不整合を起こすことになるかもしれない。あるいは、私たちが日常的な倫理的判断を守ったまま、自分たちの都合が悪くなったら未来倫理だけを捨てることができってしまうかもしれない。トカゲが自らのしっぽを切り離すように。けれども、それでは未来倫理は実効性を持たなくなってしまう。あってもなくてもよいものになってしまう。

だからこそ未来倫理は、私たちの日常的な倫理的判断の根拠となる、一般的な倫理学の原則に包摂されるべきなのだ。確かに本書は新しい倫理学を創出しようとするものではない。しかしだからこそ、未来世代への責任を強力に基礎づけようとしている、と考えてもらいたい。私たちが、私たちにとって当たり前の日常生活を送ろうとするなら、私たちは未来世代への責任を引き受けなければならない。もしもそうした責任を引き受けなければなら、私たちは自分たちの日常的な倫理的判断を自ら裏切ることになる。それが本書の基本的な考え方である。

前置きが長くなった。そろそろ内容に移ろう。

これは、私たちの未来をめぐる思考である。